
とある電気姫と一方通行

コ・カ・コーラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある電気姫と一方通行

【Nコード】

N2482M

【作者名】

コ・カ・コーラ

【あらすじ】

もし、一方通行が天井に殺されていたら、そしてもし、その一方通行が妹達を殺す前の世界にタイムスリップしたら彼は何を選択しどう生きるのか…

始まり

(暗工…)

闇に包まれた空間を彼は歩いてきた。

自分はどこを歩いているのか、何を目指して歩いているのか分からない。

ただ目の前を歩いていた。

(ここは、どこだ…ンで俺アこんなところにいるんだア?)

周りを見渡すが、空も建物も自分の歩いている地面すらも分からない。

ただ真つ暗な景色が続いているだけ。

(確か俺ア、天井のクソ野郎に撃たれて…死んだはずだ。)

その事を思い出して彼は納得した。

ああ、死んだから地獄にでも歩いてんのかと

(ハツ…第一位の一步通行様がガキを守るために死んだなんざア笑えねえな。オイ)

クツと自嘲するような笑みを浮かべる。

(チツ…くそつたれが)

あの後、打ち止めはどうなったのか、あの状況で、彼は気楽に考えられるほど楽観的ではない恐らく自分の意識が切れる前に確かに銃声を聞いた。

それでどんな状況になったのだろうか想像がついてしまう。

(畜生がア…)

何が第一位か、何がレベル5か、何が学園最強か

ガキ一人助けられねエで何言ってやがる

顔を歪め、自分の手をみる。

周りが暗闇にもかかわらず己の手が赤く汚れている気がした。

所詮悪党には何も救えない、自分のような存在は認められないほうが正しい。

だが、それでも自分はあの少女を救いたかった。

「ハッ…らしくもね工事考えてんじゃねエよ。」

ガリガリと頭を掻き、再び歩こうとする。

だがその時、後ろから目が眩む様な光が闇を照らした。

強い光だった、まるで軍用のサーチライトに照らされているような目の眩むような光だ。

しかし、どこか太陽のようにやさしい暖かさがあった。

(…んだこの光は)

手で目を隠すように振り返る。

後ろにはもう、闇は無かった。眩しすぎるほどの光が全ての闇を照らしていた。

何も無い空間が光で埋め尽くされていた。

人も壁も空も地面も暗く閉ざされていたはずの空間が、光で切り開かれていく。

その光景は別段、風情も景観も興味の対象に無い一方通行でさえ、一瞬だけ 幻想的だと感じた。

己を照らす光が段々と強くなり、自分の輪郭が分からなくなる。

さらに光が強くなり、手だけでは防げなくなって目が開けられなくなってくる。

自分はこのまま消えていくのだろうか、クソつたれた悪党の最後にはふさわしいと考える

それも悪くはない

だが彼はふと考えた、そして柄にも無く願ってしまった

(もし、この世に神様ってのがいるってんならよオ)

少しはイイ夢見させやがれ

「アア？何の冗談ですかア！？これはア！」

第一声はそれだった、無理も無い。自分は確かに銃で打たれて死んだ。

それなのに目が覚めたら自分の部屋にいたのだから。

針金のように細い体に少女のような白い肌、白髪に中性的な顔立ちの少年

一方通行は赤い目を爛々と光らせ周りを見渡す。

やはり見間違えでは無い、必要な物以外は何一つ置いていない殺風景な部屋がある。

(クソ、ワケ分かんねエ)

とりあえずソファから起き上がろうとしたところで、自分の足に何か当たった。

埃のかぶったテレビからプツンという音と共にニュースキャスター

が映り、淡々と手にある原稿を読んでいく。

『今日4月1日の天気予報をお伝えします』

(ハア？4月1日だア！？確か今日は8月31日のはずだろうがア！)

何かの冗談かと思いい入るようにテレビを見る。

がニュースキャスターは修正せずに次の原稿を読み始めていく。

「ナンだつてんだ！ワケ分からねエ！！」

次々と沸いてくる疑問に苛立ちを覚え、足元にあるゴミ箱を思い切り蹴飛ばす。

中にあるゴミが散乱し、ゴミ箱自体も粉碎される。

「チツ…落ち着け、とりあえずは現状の整理だア」

そう自分に言い聞かせるように呟き、玄関に足を向けて歩いていく

始まり（後書き）

オープニング終了です

次からキャラクター増やします

出会い

「チッ…マジでどうなってんだ」

学園都市の広い繁華街の一角で彼はそう呟いた。電光掲示板に映る日付、周りの人たちの服装、

ニュースが始まるたびに何度も感じるデジャヴ。

ここ数日彼は町を歩き回り、出した結論は理由は分からないが自分が8月31日からタイムスリップしたと言う事だった。

自分が時間のベクトルでも操作したのだろうか？

いや、時間を操る事ができていたらすでに自分はレベル6だろう。

馬鹿らしい考えだが、あれは全て夢だったのか。

認めたくはないが、一番辻褄がある。無能力者に倒されたのも、一万人以上の妹達を殺したのも、

打ち止めに助けられなかったのも全て夢だったのではないか。

だが一方通行は必死にその可能性を否定する。

(夢のはずがねエ、アレは確かにあった。確かに俺は妹達を殺した！
んな事が無かった事にされて良いワケがねエ！！)

もしも、あの時やり直しがきけば、人間ならば誰しも考える事だろう。一方通行も例外ではない。

確かに自分はその事を望んだことだってある。だが彼はその『もしも』が許せない。

その『もしも』が叶ってしまい心のどこかで歓喜している自分自身が許せない。

気がつかないうちに表情が強張っていたのだろう。目の前の学生が自分にガンつけられていると思ったのだろうか「ヒッ」っと情けない声を漏らして道を空ける。

それはどうでもよかったのだが、10歳前後の少女が母親に手を引かれながら自分の事を怯えるように見つめていた。

その様子に彼も内心悪いと思ったのか、軽く首を振り眉間から力を抜く。

(…とりあえず情報だ。このままじゃ話にならねエ)

「おい、アンチスキル呼んだほうがいいんじゃないのか？」

「やだよ、目付けられたら怖いじゃん」

「…かわいいそうに」

ふと近くでざわめいた声が聞こえた。

声のした方向を見てみると近くでザワザワと野次馬ができて、広い一角で軽く騒ぎが起きていた。

なんとなく、野次馬が見ている方向に視線を動かす。

「いいじゃんよー楽しませてやつからさー」

そこにはいかにも不良というレッテルを貼られた数人の男が少女を囲むように絡んでいた。

学園都市では珍しい光景でもない、最新のセキュリティやら何やらで治安のいい学園都市と色々と言われてはいるのだが

裏路地の不良なんて幾らでもいる。学区によってはそういう奴等しかいないような場所だってあるのだ。

普段の彼ならば見向きもしないだろう。誰が襲われていようが興味もない

アンチスキルにでもまかせときゃいい。そう考えていたはずなのだが

「
ッ」

一瞬だけ茶髪が見えた。

男たちの影になっているため顔は見えないが、そこに誰がいるかが分かった。

彼は口の中で大きな舌打ちをして足を急転換させる。

灰色の半袖のブラウスにサマーセーターという格好、常盤台中学生の御坂美琴はウンザリしていた。

「いいじゃんよー楽しませてやつからさー」

「結構よ、私急いだからどいてくれる？」

「つれねえなー、んじゃ無理やり遊びに行こうか？」

「本当に急いでの、いい加減しつこいと怪我させるわよ」

「怪我って？おいおいどうやって怪我させるんだよ。」

ため息混じりに辺りを見渡すと、不良たちがニヤニヤしながら自分の事を取り囲んでいた。

彼女自体このような経験は何度もある。慣れているし、別に軽く電撃を放って追っ払えばいいのだが
周りの目というものがある

(しょうがないわねえ…)

彼女は元々気が長いほうではない、あまり口も上手い方でもないし何よりこんな雑魚のために自分が気を使ってやっていると云うのがムカつく

(わざわざ忠告してやったんだから、火傷くらいは覚悟しなさいよね。)

目を細くして体を強張らせる。彼女もこの歳で殺人犯にはなりたくないの、せいぜいスタンガン位の電圧を一気に周りの奴らに食らわせてやる。それでとっとと帰って見たいドラマでも見てシャワーでも浴びて寝よう。

そう思った矢先に

「何だデメエ！」

困んでいた不良の一人が突然叫ぶ、見るとどうやら後ろから一人の男が歩いてくるのが見えた。

「……」

男にしては華奢な体つきで白い肌に白い髪

何より印象的なのはその風貌とは対象的などこか暗さを帯びた赤い瞳が不機嫌そうに
細められこちらに向かって歩いてくる。

「聞いてんのかコラア!!」

自分たちを完全に無視して歩いてくる少年に痺れを切らしたのか体格のいい不良の一人が男を突き飛ばそうとする。
華奢な少年と体格のいい不良では力ではいささか分が悪い。

「うわっ!?!」

だが何故か不良の方が弾き飛ばされ、床に転がる。

(!…能力者)

彼がどんな目的で自分の方に近づいてきたかは分からない。が学園都市の第三位の自分の実力を持つてすら、こいつは強いその事を直感的に感じ取れた。

少年は不機嫌そうにしながら、床に転がった少年を一瞥もしないで残りの不良を睨む

「もしかして、こいつって…」

「ああ…間違えねえ」

いつの間にか不良の興味は自分よりも目の前の白い男に移っているようだった。

さっきまで確かにうつつとうしかつたのだが、こつも簡単に興味がなくなれると

どうもこの男に負けたような気がする。

「よお、まさかこんな所でテメエを見つけられるなんて思ってなかったぜ」

「ああ？テメエなんか知らねえよ。目障りだからどっかに失せる」

「目障りのなのはテメエだろおがあああああ！…」

絶叫と共に隠し持っていたナイフを構えて、男の華奢な体に全体重を込めて突っ込むようにナイフを突き入れる。

ボギンという嫌な音が不良の腕から聞こえ、次にギヤアアという新たな絶叫が路地に響き渡り

不良は手首を抑えながら汚いコンクリートを転がり回る。

男は残りの不良を睨みつけて「次は誰の番ですか？」と挑発する

「うわああああ、やっぱり化け物だあ！」

「こんな奴にかなう訳がねえ！」

残りの不良達はその様子を見て戦意がすっかりなくなってしまったのだろう。

情けないお決まりの台詞を吐きながら文字通り尻尾を巻いて逃げていく。

「…」

（な、なによ？）

逃げていった不良達を確認して少年は自分の方に視線を向けてきた。赤い瞳が自分に向けられる。負けじと睨み返したが男の方はそれを無視して立ち去ろうとする。

「はあ？待ちなさい、アンタ」

「…」

「ちょっと、聞いてんの？」

「…」

「…無視してんの？」

「…」

プチッと実際そんな音はしていないのだが、確かに聞こえたような気がする。

自分は学園都市の第三位の電気使いだ。あの程度の雑魚なら100人来てても返り討ちに出来る自信がある
それを勝手に助けたと勘違いして勝手に満足して、自分を無視して勝手に帰る

それは沸点の低い彼女の怒りと対抗心を刺激するには十分すぎる状況だ。

「待ってって言うてんだろぅがあああああああ！！」

口が裂けてもお嬢様とは言えない怒号と一緒に前髪から電撃の槍が形成され、男に襲い掛かる。

電圧はせいぜい気を失う程度だ。何も問題は無いと思っていたが

「！」

男の体に電撃の槍が命中した瞬間、まるで反射したかのように自分の方に電撃が跳ね返ってきた。

とっさに体の軸をずらし回避するが、初めて起こった現象に呆然としてしまう。

「……」

男はもう一度こちらを振り向き、こちらを見ていた。

「アンタ、何者？」

「……」

そう聞いたはずなのだが男はまたしても答えずに無視して立ち去る。

白い男は最後までこちらを振り向かず裏路地の闇に消えていった。
今度は止める事ができなかった……

出会い（後書き）

美琴しか出ていない…

うまくキャラクターが動かない…

悪党（前書き）

説明的な進行からどうしても抜け出せない…

擬音とか物とかで説明できる人が羨ましいです。

悪党

学生たちが人口の8割を占める学園都市では夕方になると授業が終了し帰宅するために、町が学生で溢れかえる。

家に真つ直ぐに帰る者、ゲーセンやカラオケにでも行き遊ぶ者、ファミレスで夕飯を済ます者と様々だ。

その人で溢れかえった大通りを一人で両手をポケットに突っ込んだまま歩いている白髪の男がいた。

(なにやってんだ俺は！！なんでアイツに関わってんだクソツたれ！！)

一方通行は苛ついていた。

何故先程の少女に関わりに行ったのだろうか、あの少女は強い。

自分には遠く及ばないが、それでもあの不良達を叩きのめせる位の力はある。

自分がわざわざ助けに行かなくても良かったはずだ。

なのになぜあの少女を助けようと思ったのか。

「ハッ、贖罪ってヤツかア？……くっだらねエ」

一方通行は心底つまらなそうに笑った。

彼がレベル6を目指した理由、それは他人を傷つけない事だった。

彼の能力は昔から強かった。それゆえ、コントロールできず能力に

振り回され、幼かった彼は多くの人を傷つけた。

他人に少しでもイラつきを感じると、それを傷つけてしまった。そして目の前には多くの人が自分に対して畏怖の目で自分を見ていた、まるで化け物でも見るかのような目で。

それゆえに、彼は他人と一切関わる事をやめたのだ。他人に感情を向けなければ他人は傷つかないですむ、だからレベル6になって絶対的な力を持ち、他人から認められ、相手を傷つけないですむ様な『絶対』を手に入れようと考えたのだ。

それなのに彼は関わってしまった。今までの生き方を否定して、打ち止めの時もそうだが自分はやはり何かが変わってしまったようだ。

だから彼はもう一度だけ呟く

「…くっだらねエ」

翌日、一方通行はある研究所にいた。

その後、苛つきを通り越して呆れに入ってしまった彼は、情報収集は後回しにしてコンビニでコーヒーでも買って寝ようと考えていたのだが、突然、研究所からの呼び出しがあったここに来たのだ。

この時期に行われた実験は一つしかない。
妹達を2万人殺す悪魔の実験、そう絶対能力進化実験だ

研究室内部のそこそ広い、実験室の中で一方通行と検体番号00001号はお互いに向かい合っていた。

00001号は御坂美琴のクローンで基本的に本物と見分けがつかないが
目の前の00001号は額に装着しているごっこつした暗視ゴーグルとどこか焦点の合わないおぼろげな瞳
そして手元には、腕ほどの大きさのアサルトライフルが抱えられている。

「これより第一次実験を開始します。」

「…」

無表情で無機質な声

まるで機械かと思うような声でそう告げると暗視ゴーグルを目元に下ろし

流れるような動作で安全装置を取り外し、標的に銃口を向けて引き金を引いた。

強烈な発砲音と共に、無数の弾丸が押し出され、銃口から飛び出す。だが彼を傷つける事はできなかった。彼に当たったはずの弾丸は弾かれ、周りの壁に着弾していく。一方通行が銃弾のベクトルを操作したのだ。

「…銃弾での攻撃は無効であると判断、ミサカは戦術の見直しと共に対象の能力の分析をします。」

装着した弾倉が空になるまで撃ちつくした所で、前髪から青白い火花が形成される。槍のような電撃が一方通行を襲うが、これも一方通行に届くことなく地面に逃がされていく。

「いい加減たリィからよオ、もう終わりにすんぜエ」

首をゴキゴキと鳴らせながら一方通行はこちらに向かってくる

「…対象にはバリアのような能力があると判断、次の行動に…っ！」

そう呟いた瞬間に目の前に一方通行の拳があった。

咄嗟に銃身を盾にしてこの一撃を防ぐが
いきなり襲ってきた衝撃に体の踏ん張りがきかずに後方に弾き飛ば
され、後ろの壁に激突する。

「がつ！」

肺の中から空気が押し出される。
何とか体制を立て直そうと呼吸を整えながら、殴り飛ばした相手を
見ようと顔を上げようとするが
首に万力にでも挟まれたかのような力が加えられる。

「っ！」

必死に目を開けた先には真っ赤な瞳が鋭く自分を射抜いていた。

(ンだよ、あっけねエ)

手で吊り上げるように首を締めている少女を見る。

「っ……!!……!!……っ……!!」

少女は苦しそうに目に涙を浮かべ手足をバタつかせながらもがいていた。

なぜ自分はこの様なにも無駄な事をしているのだろうか
撃たれた時には操作ではなく反射ならダメージを与えられていた
殴り飛ばした時も銃身ごと目の前の少女を粉々すれば勝負はついていた
いた

この瞬間にも血流操作で少女を殺す事は簡単だ。

少女の頬に涙が伝う。

(…チツ)

一方通行は00001号を放り投げるように手から離す。
00001号は今まで滞っていた空気を吸うために激しく咳き込んだ。

「実験は中止だア。上の連中にそう伝えとけ」

少女が息を整え終わった所で彼はそう言った。
呆然とした顔で彼女はどうしたら分からないとでも言うつかのようにこちらを見る。

その様子に彼は盛大な舌打ちをして両手をポケットに突っ込み、背を向けた。
入り口のドアを蹴飛ばす。

ドゴォ！！と衝突事故にでも起きたような音を立てて鋼鉄製のドアは吹っ飛んでいった。
一方通行は唾を吐き捨て通路を歩いていく。

少女は彼が見えなるまで通路を見ていた。

理由（前書き）

う、うまく出来ない…本当に言葉って難しいですね
小説家って本当に偉大ですね

理由

とある昼過ぎのファミレス、主に昼食を作るのがめんどくさい学生や、外回り中にサボっているサラリーマンが集まり

それなりに繁盛している所だ。

所詮ファミレスなので特にご飯がおいしいとか雰囲気がいいと言う訳でもないのだが、近くに学校やビルが多くあるおかげかピークの時間帯を過ぎたというのに、席はほぼ満席状態だった。

そんな中、四人席で目立つ二人組みの男女が向かい合っている。

「これがファミレスというものですかと初めて見る物にミサカは内心興奮しながら周りを見渡してみます。」

「…キヨロキヨロすんな、ガキかテメエは」

一方通行と00001号だ。

(…なーンでこんな事になっちまったんだか)

一方通行は隣で周りを見渡している00001号をため息混じりに

見る。

話はほんの数十分前に遡る。

(マズッ!…んだこのコーヒーは!?これなら泥水の方がまだマシだろうが!!)

一方通行は先程、自動販売機で買った片手に缶コーヒーに悪態を吐く。

遅い起床と共に彼はファミレスに向かっている。

なぜなら、つい先程まで惰眠を貪っていたのだが、昨日から何も食べておらず空腹で目が覚めてしまった。

冷蔵庫の中に何か無いかと見てみても大量に買って飽きてしまった缶コーヒーしか無くてしようがなく

ファミレスで飯でも食うかと考え歩いていたので。

時刻はもう午後二時を回っており外回りに出ているサラリーマンや、授業を終えたかサボった学生が辺りにちらほら見える。基本的に他人には興味が無い一方通行はその事は頭に入れずマズイ缶コーヒーを睨みつける。

(…このクソ業者が、何入れたらこんな味になりやがる)

成分表を見た後に、絶対に苦情の電話を入れてやろうと決意して、携帯電話を取り出そうと目を離す

(……………なんだア?)

ファミレスにもう着く直前に、自分に近づいてくる人影に気がついた。

どう見ても自分の事を直視しているし、顔にも見覚えがある。

「こんにちは、奇遇ですねとミサカはあなたの事を探し回っていた事を隠しつつ当たり障りの無い挨拶します。」

「……………ンでオマエがこんなところにいるんだよ」

常盤台の制服で御坂美琴と瓜二つの顔、少女にはアンバランスなこっぴい軍用ゴーグルと全く動かない表情筋
そこにいたのは昨日見た少女だった。

内心、隠せてねエだろうがと突っ込みを入れつつ、何で此処にいるのか聞く。

「ミサカは昨日あなたに殺される予定だったので今日は特に予定が無く、研究者に許可をもらって外に出ていましたとミサカは長々と今日の経緯について説明します。」

オリジナルに会ったらどうすんだとか目立つゴーグルを取ったらどうかとか色々突っ込みどころはあるのだがそれら一切を飲み込んで

「…なーンなんですかア？」

「？…なんだとはどういう事でしょうかミサカは言葉の足りないあなたに呆れつつ説明を求めてみます」

一瞬喧嘩売ってんのかと眉をひそめかけた所で一々こいつ等に相手しててもしょうがないと考えとりあえず言葉を直す。

「俺を探し回ってたってこたア、なんか俺に用事があるんだろ？それともボコられてマゾに目覚めちまったって話じゃねエだろうなア？」

「ミサカには被虐願望はありませんとミサカは否定しつつ用件があった事を思い出し説明しま…」

グーっと言葉を続けようとしたときにかわいらしい空腹の合図が聞こえた。周りは昼間の路上なので車のエンジン音やすれ違う人々の喧騒も聞こえるのだがその音はよく響いた。

「…………朝からあなたを探し回ってましたから。」

恥ずかしがる様子は無いが、少女は腹を押さえて言い訳をして求めるような目でこちらを見ている。

「チツ…行くぞ」

自分の事をわざわざ探しに来たと言う事は何か実験に関しての伝えることかもしれないと勝手に納得して舌打ち交じりにファミレスに向かう。

後ろでは子犬の自作戦が上手くいきましたとミサカは勝利宣言をして昼食がありつける事に喜びます、などとほざいていたが。

「研究所以外の施設は初めて見るもので色々興味があるのですとミサカは懇切丁寧に自身の箱入りっぷりを説明します。」

「あア、そオいやお前ら実験以外の事は知らねエんだったな」

「いえ、一応知識はあるのですが知っているのと実際に見るのは違うものですとミサカは百聞は一見にしかずと言う言葉に頷いてみます。」

ミサカ達は受精卵から14日間で成長させられ学習装置と呼ばれる、脳に技術や知識をインストールするための装置で教え込まれる。そのため知識や常識は知ってはいるのだが、それを実際に経験はしていないためする事全てが新鮮らしい。

そんなことには一切興味が無い一方通行は「あつそオ」と流す。

水を運んできたウエイトレスに適当に注文すると、前の方に座っていた00001号も注文する。

そんな当たり前の行動だがふと違和感を覚える。

「つうか、金持ってんのかオマエ？」

「こつ言つことは男性が払う物だと、さも当然のようにミサカは要求します。」

「…オマエが奢る価値のある女なら何も言わねエよ」

ため息混じりに00001号を見る、悪気があるのかないのか全く動かない表情筋ではよくつかめないと一方通行は思う。

「お姉さまの顔は世間一般からは美少女であると研究者から聞きましたが？」

「オマエみてえなガキなんざ股開かれて誘われても相手にしねエよ」

余計な事を教えている研究者に口の中で舌打ちをして、00001号にはデリカシーのカケラも無い軽口を叩く。

ちょうど会話が途切れた所でタイミング良くウエイトレスから先に注文したコーヒーが届く。

先程の会話が聞こえていたのか営業スマイルの眉が少しばかり引きつっていた。

カップを手に持ち、そして目の前の少女を改めて見る。

「ンでエ、何でオマエはわざわざ俺に会いに来たンですかア？」

「…あなたに聞きたい事があったからですとミサカは心中を吐露します。」

「あん？何聞きてエツウンだよ。」

00001号は一瞬、躊躇ったように顔をうつむける。その様子に一方通行は怪訝そうに眉をひそめた。

「…なぜ、あの時ミサカを殺さなかったのですか？」

「あア？」

「なぜ、実験を中止しようと思ったのですか？」

「…」

「私達、妹達はあなたに殺されるためだけに造られた存在です。あなたに殺される事が私達の願いであり存在理由です。」

「…」

「それなのに何故と全ミサカを代表しミサカはあなたに問いかけます。」

一方通行はコーヒーを一口飲む、ブラックの強い苦味が口の中に広がる。

「…さつきから聞いてたらよオ、なーンか俺がテメエ等を助けた見てエにきこえンだけだよオ」

一方通行は気分を害したように少し苛立った口調で、つまらなそうに答える。

「違うのですか？」

「ンなわけねエだろ勘違いしてんじゃねエぞクソガキが」

一方通行は目の前の少女を睨む、気の弱い人間や小動物ならば卒倒しているかすぐさま逃げ出すだろう。

しかし、目の前の少女は逃げ出さずに彼の目を見返す。

「俺ア悪党だ、悪党の中でもクズの中のクズのクソツたれた悪党だ。」

「…」

「悪党は自己中だから正直自分の事以外どオでもいい、他人がどオなるうが知ったこつちゃねエ、オマエの事もどオでもイイんだよ。」

00001号は彼の意図が掴めずに首を傾げるが一方通行はその様子を気にすることなく言葉を続けていく。

「だからオマエの願いだとか存在理由だとかも関係ねエ、ちよつとやる気が失せたとかそんなモンだ。」

「だがどオしても死にてエつつうんなら止めねエし、知らねエよ勝手にのたれ死ンでろ。」

「…そう、です、か。」

その言葉にバツが悪く思ったのが、00001号は顔をうつむけぼつり、ぼつりと答えた。

目の前の少女を見て何を思ったのか分からないが不意に一方通行の口が動く。

「ただ」

「え？」

近くにいた00001号も聞こえないほどの小さな声が確かに耳に入った。顔を上げて聞き返そうとしたところで

チツと舌打ちをした後に「何でもねエ」と言う。

「……」

「……」

会話が途切れカヤガヤと混雑したファミレスの騒音が耳に入る。忙しく動くウエイトレスは目の前を通り過ぎると近くの席の客に料理を渡した。

「……」

一方通行は冷めたコーヒーを一気に飲むと黙ったまま席を立ち上がる。

「どこか行くのですかとミサカは問いかけます」

「ああ、食欲なくなっちゃったわ」

そう答え財布から何枚か札束を置き、冷めた表情のまま000001号を残し一方通行は出口に向かおうとする。

「っ、あのっ」

ガタッと席を揺らしつつ000001号は立ち上がった。一方通行は首だけ動かして少女を見る。

無表情のほすの少女の顔が一瞬悲しそうに見えた

「また、会えますか？」

遠慮がちに問いかけてくるが答えずに彼は出口へと向かっていく

出口の扉を開ける直前に「さアな」と彼は確かにそう呟いた。

窓の無いビルの一室

学園都市総括理事長アレキスター・クローリーの住んでいるという建物だ。

その建物の一室、周りは一帯が暗く必要な物以外の何もかもが抜け落ちた場所、わけの分からない機械が多く置かれた場所、そこに爛々と不気味に輝く大きな試験管があり、人間が入っていた。人間は逆さまに入っており、

閉鎖された空間の中で中の人間は考えにふけていた。

「…プランが狂い始めたな」

ぼつり、とそう呟く、だが彼に焦った様子は無い。

今回のプランが上手くいかなかったら次のプランを進めるか上乗せして修正すればいいだけの話だ。

そう考え次のプランを進めるため思考し、ひたすらに考察を繰り返す。

「さて、次のプランを動かすか」

モニターに視線を向け、毒々しい笑みを浮かべ呟く

彼を……一方通行を覆う闇は確実に蠢いていた。
その全てを取り込むように

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2482m/>

とある電気姫と一方通行

2011年10月6日20時46分発行